

生まれ変わった建物たち

Reborn
01

尾道ガウディハウス (旧和泉家別邸)

豊田代表が空きPを立ち上げるきっかけとなった建物で、空き家再生のシンボリック存在。

尾道駅の裏、急傾斜地のわずか10坪の狭い土地の中に、当時流行った洋風の建築技法が細部にまで贅沢に施された住宅です。1人の大工さんが3年かけ、1933（昭和8）年に完成したといわれており、特に建物横の路地に沿った傾斜・カーブで作られた階段は製作に1年かかったとも。国の登録有形文化財にも指定されています。

1980年頃から空き家となり、老朽化で倒壊の危機にあったところ、2007（平成19）年から10年以上再生工事を続け、2020（令和2）年3月ついに完成しました。スペインが誇る建築家、アントニ・ガウディの作品「サグラダ・ファミリア教会」のように、いつ完成するか分からないという意味を込めた愛称がついています。



インタビュー Interview



豊田 雅子さん

NPO法人尾道空き家再生プロジェクト代表理事
尾道市生まれ。2002年に尾道市にUターン。07年に任意団体「尾道空き家プロジェクト」を設立。取材や講演依頼も多く各地を飛び回っているが、再生物件の炊事場で割烹着姿を目撃することもある。インタビュー時に目を閉じることが多く、カメラマン泣かせでも知られる。

● ガウディハウス完成しました！

感無量です。干支を一回りする以上の年月がかかってしまいました。（笑）完成記念のお披露目会では3日間で1,000人もの人に来訪していただきました。今後は一棟貸しの宿泊やイベントスペースとして供用する予定です。

● 物件を再生する際のポイントは？

材料などが調達できないときでも以前の姿を想像しながら工夫して、できるだけ当時の姿を復元しようとしています。ガウディハウスでは内装や

部屋の備品等に地元の作家の作品を使っていて、尾道らしさを感じていただけるようにしています。

● 空きPの今後について

移住者への支援を行政と一緒に続けていきたいと思っています。また、空き家の再生も従来通り続けながら、古い貴重な建物を次世代へ残す意義について、地元の人々やこれからの未来を担う子どもたちに伝えていく活動をもっとできたらと考えています。



Reborn

02

しょうすいえん 松翠園大広間

戦後間もなく建てられた旅館「松翠園」の宴会場だった建物です。数多くの宴や冠婚葬祭の場として使われた60畳ものスケールの大広間を、70年の時を経て貸スペースとして再生しました。長さ16mの一枚物の松を使った縁側からは、新しい尾道駅がよく臨めます。

中でも白眉の出来なのは、格子天井に描かれた天井画。寄付をいただいた団体・個人のロゴを、尾道市立大学生や卒業生の皆さんが日本画の顔料を用いて制作しています。

尾道市立大学ではゼミで空き家問題について扱ったり、学生たちが大学で学んだデザインスキルを活かして、空きPの冊子やフライヤーの制作も行うなど空き家再生に大きく関わり、更にこうした活動は先輩から後輩へ引き継がれていっています。



天井画を制作中の尾道市立大学生や卒業生たち



Reborn

03

みはらし亭



千光寺公園内の見晴らしのいい一等地に1921（大正10）年に別荘として建てられ、1969（昭和44）年からは旅館として営業されていましたが、その後は30年近く空き家になっていました。

2015（平成27）年から、空きPを中心とした多くの人たちの力で改修工事が進み、翌年、ゲストハウスとして再生されました。大正時代の雰囲気を残しており、日本文化好きの外国人に特に人気があります。1階のカフェは千光寺山に登ってきた人の喉を潤す絶好の休憩場所で、店内から尾道水道の風景を一望することができます。